



古市公威博士銅像成る

我國工學技術界の元老として至寶的存在であつた古市公威博士が逝去されてから早くも3年になるが、此間に土木工學關係の先輩を主とする朝野の學者名士發起の下に故古市男爵記念事業會が設立され、一般工學技術方面より集まつた寄附金數萬圓を以て銅像建設及傳記編纂等の事業が、各分擔委員により大々進められてゐたが、第一に銅像が竣成したので、

6月5日午後2時本郷區東京帝國大學工學部前庭に於て其除幕式が舉行された。

式場には故博士の長男古市六三氏が千穂子夫人及6人の子女を伴ひ大阪から出席し、親族席には博士の次男堤啓次氏、瀬川昌世博士、林秀三博士の家族が列席され、來賓席には日本の工學會を代表すべき各方面の先輩技術家及び朝野の名士200名餘參列し

て大サント眼の会場を満した。

定刻記念事業委員長名井九介博士拍手に迎へられて銅像臺座石壇上に立ち、記念事業の各事業の経過を報告し、役員としての挨拶を述べられ、次いで故博士の愛孫たる吉市治子嬢の手により引綱が引かれてスル々々として幕が下されると、御下賜の鳩杖を右手に支へ、ソファに腰を下した老博士の生けるが如き像が現はれた。

明治初年フランスに留學して土木工學を専攻し、我國の港灣、河川、鐵道、水力電氣、其他多數の公益工事に身を命を忘れて盡力した偉人の風貌は此所に永久不滅の信念を語るが如く見え、暫らくは止まらぬ拍手と感激のシーンであつた。

次いで実行委員眞野文二博士立つて長文の式辭を朗讀して、故博士の人格と功績の數々を挙げられ、工學會に對する故博士の偉大なる指導的精神を稱へ、終ると銅像委員たる内田祥三博士が立つて銅像建設の工事報告を大要次の如く述べられた。

工事概要

〔銅像〕 高さ約6.10米、底面約3平方米、重量約1.5噸

〔臺座〕

間口	約 19.39米	(64.0尺)
奥行	〃 7.18〃	(23.7〃)

基礎高さ	〃 0.60米	(2.0尺)
像座高さ	〃 2.12〃	(7.0〃)
背面衝立高さ	〃 7.27〃	(24.0〃)

〔臺座構造概要〕 構造主體は總て鐵筋コンクリート造にして基礎の深さは約2.42米なり。臺座の設計は廣さ約115平方米の基礎を設け其前面中央には階段を附し後方及左右には石欄を廻らし中央背後には高さ衝立を有す。基礎中に像座を設けて銅像を設けて銅像を据え像座の左右の基礎上にキナラ一對を植樹す。

使用石材は像座及衝立の中央に廣島縣産黒花崗を本磨きとして使用し其他は全部茨城縣産稻田花崗石を小叩き仕上として使用せり。石材使用量は約500立方米なり。

〔工期〕 昭和11年9月起工 昭和12年5月竣工

〔工事直接關係者〕 銅像——堀道二、作

臺座——渡邊仁、懸賞當選原設計

内田祥三、實施設計及監督

吉田實、〃

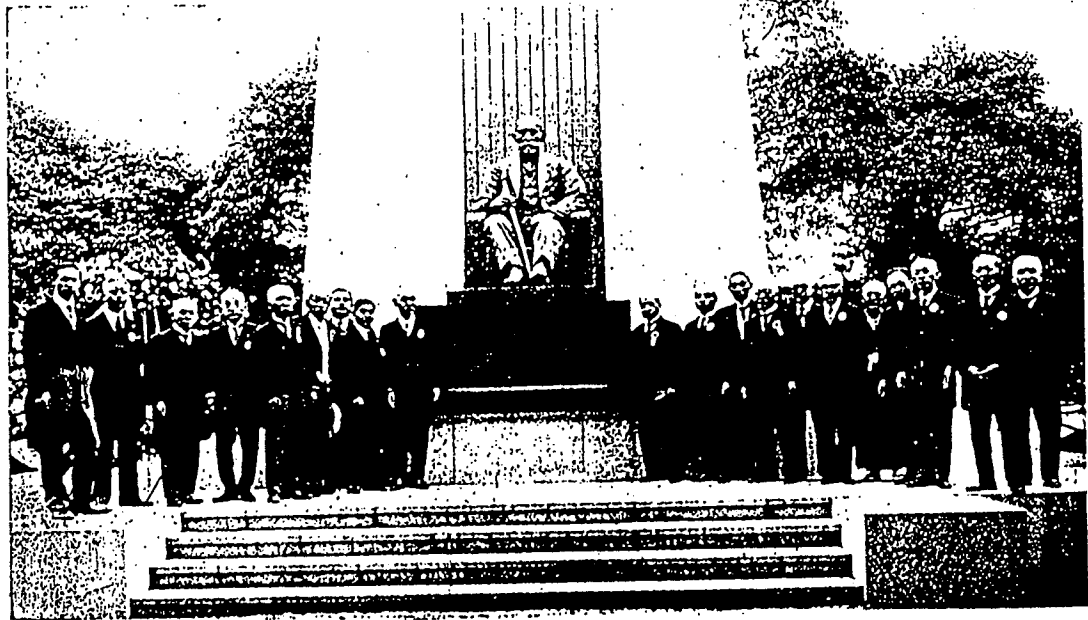
高山英華、〃

津守繁、〃

銘方——鹽谷温、撰

工藤壯平、書

臺座工事——株式會社安藤組



次いで傳記委員丹羽鋤彦博士が銅像前に進み出て古市博士傳記本奠の式をすますと、來賓を代表して樞密院議長平沼祺一郎博士が颯爽たる姿勢で古市博士の人物性行を讃美したる祝辭を朗讀されて多大の感銘を與へ、東京帝大學總長、長與久郎博士は東京帝大に對する古市博士の功績を讃へられた。次いで遺族を代表して古市六三氏より挨拶があつたが、その中に

故古市博士は病床に於て近頃は種々なる人の傳記が編纂されてなるが、萬一私の没後に於て傳記編纂の議が出たら、それは御断りして貰ひ度い、それは傳記を作られると、私一人が偉いものに書かれて、他の多數の協力した實際に仕事の爲に骨折つた人々に申譯ない事である。天下の仕事は一人の力で出来るものではない、多數の人の力であるから私達の傳記など作るに及ばない云々と申されたとの事であ

る。而して一應は遺族の方から傳記編輯を断はられたのであるが、記念事業會としては我國の工學會の爲に史實散佚しても困るから、此際是非にも編纂して置かねばならぬので、其事業を進められたとの事である。

斯くて銅像除幕式は非常に感激を以て式を閉ぢた。尙ほ古市博士の傳記は近く出版の運びとなる由である。

(因に本號巻頭に名井博士の詩吟を掲載するの榮を謝す。尙寫眞は古市男の銅像と除幕式當日の記念撮影で、銅像を中心に向つて左側中川吉造、佐野利器、八田嘉明、塚本靖、名井九介、岡田竹五郎、谷井鋼三郎、松田竹太郎、堀進一の諸氏、同じく右側前野文三、古市六三、正木直彦、丹羽鋤彦、西脇吉久、内田祥三、中村徳太郎、森井健助、平賀謙、今泉喜一郎、牧田巖の諸氏)